様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２６７７

研究課題名（和文）コーパスに基づくフランス語の接続表現の共時的、通時的研究

研究課題名（英文）Synchronic and diachronic studies of French connectors based on corpora

研究代表者
秋廣　尚恵（Akihiro, Hisae）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：６０７２４８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は,接続表現の多機能性について,以下の3つの観点から研究を進めた.①共時的観点から,東京外国語大学院で蓄積されてきた話し言葉コーパスに加え,現在,フランスで公開されている話し言葉,及び書き言葉コーパスを利用しながら現代フランス語の接続表現の多機能性について,記述研究を行った.②通時的観点から,語源辞典,古フランス語,中期フランス語のコーパスを分析することで,特に文法化の観点に焦点を当てながら,接続表現の史的変遷を記述した.③さらに,①の共時的記述研究と②の通時的記述研究の結果を総合的に組み合わせ,接続表現の持つ多機能性とそれぞれの接続表現の本質的な特性をより明確に記述,分析,説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
（１）東京外国語大学が蓄積したフランス語話し言葉コーパスは、フランス共和国のORFEOプロジェクト（「フランス語の話し言葉と書き言葉の研究のためのツール」作成プロジェクト）に組み込まれ、2018年から、インターネット上で、無料で一般公開されることになった。研究者向け、またフランス語教育に携わる教員や学習者向けに有益な資料として有効活用されている。
（２）フランス語の接続表現の研究成果は、国内外の学会、論文で発表され、フランス語の語彙と文法構造と談話の関係、さらには、コミュニケーションの手段としてのことばの側面を明らかにし、フランス語学の基礎研究、フランス語教育の応用研究に貢献する資料を提供した。

研究成果の概要（英文）：We studied multi-functionality of French connectors from the following three points of view:(1) We conducted a descriptive study on the multi-functionality of connectors in modern French, by using the spoken language corpus accumulated at the Tokyo University of Foreign Studies as well as other spoken and written corpora published in France.(2) By analyzing corpora of old and middle-age French, we described the historical evolution of French connectors, especially from the viewpoint of grammaticalization.(3) Combining both synchronic and diachronic analysis, we tried to explain the polysemic, multi-functional and essential characteristics of French connectors.

研究分野：言語学

キーワード：接続表現　共時的研究　通時的研究　接続表現　談話　語彙　文法　コーパス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

接続表現は、接続詞、前置詞、名詞、副詞など複数の品詞にまたがる表現である。フランス語学の代表的な学術誌である *Langue Française 200* (2015 年 12 月号) でこの問題をめぐる特集号－*Les liaisons des prédications* (述辞の連接関係)－が組まれたこともあり、接続表現の機能の問題はフランス語学において最も注目を浴びている問題の一つである。

伝統的研究では、接続表現は「命題内容」を表す「節」の連接関係を標示する機能を担うと考えられ、もっぱら論理意味論的な観点から研究されてきた。しかし、1980 年代以降、Oswald Ducrot や Jean-Claude Anscombre あるいは Jacques Moeschler の語用論的研究が進展し、さらに、一般言語学の分野でも Haiman and Thompson (1988) *Clause Combining in Grammar and Discourse* 以降、重要な研究が次々に発表された。こうした流れを受け、フランス語学の共時的研究、通時的研究の両面において連接される要素や連接のタイプに応じて接続表現は多様な機能を持つことが明らかになった。その多機能性をいかに記述、説明していくかという点が本研究開始当初の本研究の問題意識の焦点であった。

現代フランス語の共時的研究に関しては、旧エックス統語論研究グループ (以下 GARS と略す) の論文集 Jeanne-Marie Debaisieux (ed) (2013) *Analyses linguistiques sur corpus, subordination et insubordination en français* や、スイスの談話文法研究グループの論文集 Marie-Jones Béguelin & Gilles Corminboeuf (eds) (2010) *La Parataxe* などの研究成果があった。また、通時的研究に関しては、Elisabeth, C.Traugott らの文法化理論に代表される一般言語学的研究により、接続表現が統語的依存関係を標示する用法から、語用論的関係を標示する用法へと変遷する傾向が提示され、フランス語に関しても A. Rodriguez-Somolinos, Christiane Marchello-Nizia, Annie Bertin, Bernard Combette らによる文法化現象の史的記述がなされてきた。本研究ではこれらを土台とした分析を行ってきた。

研究代表者･研究分担者はこれまで、東京外国語大学大学院、21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(http://cblle.tufs.ac.jp/tag/fr/index.php?menulang=ja) の枠組みにおいて、2005 年度以降、フランス語の話し言葉コーパスのデータの蓄積を行ってきた。蓄積されたデータは 70 万語を超えるインフォーマル会話コーパスであり、現在、本学院の語学研究所に保管されている。研究代表者は、これらのデータを用い、共時的観点から、現代フランス語の因果関係を表す接続表現の研究に取り組み、統語的依存関係と語用論的依存関係の両面から接続表現の多機能性を分析し、その成果を国際会議などで発表してきた。研究分担者も、これまで古フランス語および現代トルコ語の談話標識、中世フランスにおける証書の談話機能、否定辞の史的変遷に関する記述的考察等を行ってきた。

2. 研究の目的

本研究は、接続表現の多機能性について、以下の 3 つの観点から研究を進めることを目的とした。

- 共時的観点から、現代フランス語の接続表現の多機能性について、これまで東京外国語大学院で蓄積されてきた話し言葉コーパスに加え、現在、フランスで公開されている話し言葉、及び書き言葉の参照コーパスを利用しながら、統語論、意味論、語用論、韻律論を総合した記述研究を行う。

- 通時的観点から、語源辞典、古フランス語、中期フランス語のコーパスを分析することで、特に文法化の観点に焦点を当てながら、接続表現の史的変遷を記述する。

- 最終的に、共時的記述研究と通時的記述研究の結果を総合的に組み合わせることによって、接続表現の持つ多機能性とそれぞれの接続表現の本質的な特性をより明確に記述、分析、説明する。

3. 研究の方法

本研究では、共時的研究部門 (秋廣担当) 通時的研究部門 (川口担当) の 2 つの班に分かれ、連携しつつ、各自の専門分野に関わる研究を進めた。

- 共時的研究部門においては、これまで本大学が蓄積してきた話し言葉に加え、フランスやヨーロッパで公開されたデータを積極的に用い、海外協力者のアドバイスを得ながらコーパス駆動型調査を進めた。

- 通時的研究部門においても、フランスおよびヨーロッパで構築された史的言語コーパス、語源辞典、文法家の記述を利用し、海外協力とも連携をしながらコーパス言語学的分析を行った。

- 2 つの班は緊密に連携を取りながら、それぞれの分析と結果を参照しつつ、フランス語の接続表現の多機能性について、通時的観点からの裏付けと多機能性を生み出すきっかけや本質的機能を分析し、説明した。

4. 研究成果

(1)東京外国語大学　フランス語話し言葉コーパスについて

- 2015 年にパリで録音したデータの整備が未完了であったが、これらのデータの転写を 2018 年に、全て完了した。現在、音声ファイルと照らし合わせつつ、校正を行っている。また、このデータ整備により、これまで蓄積されたデータと合わせて通算 10 年間の話し言葉データがそろった。このことにより、話し言葉の時期ごとの変遷を見る通時的研究をするのに適したコーパスが作成された。
- また、このデータのうち、2005 年、2006 年、2010 年、2011 年収録分は、パリ第 3 大学の Jeanne-Marie Debaisieux 教授がフランス共和国の ANR プロジェクト「書き言葉と話し言葉のフランス語研究のためのツール（Outils pour la recherche du français écrit et oral）」に提供され、このプロジェクトのコーパス「現代フランス語研究コーパス（corpus pour l'étude du français contemporain）」の下位コーパスとして、その Web サイト（https://www.projet-orfeo.fr/）で 2018 年より公開されている。このサイトのデータについては、音声と転写がアライメントされたコーパスで、無記名化されたデータを検索することが可能である。また統語レベルでのタグ付けも付与されている。

(2)共時的研究について

- 理由を表す接続表現である parce que、 puisque、 car について、上記のコーパスの分析に基づき、記述的研究を行った。2018 年 1 月には、パリ第 3 大学で行われているインフォーマルな話し言葉コーパスにおける文法記述研究プロジェクト FRACOV（http://www.univ-paris3.fr）のサイトで公開された。さらに、parce que に関して、譲歩的なコンテクストでの使用されるケースが稀ではあるが存在するのに気づき、それらの用法に関して研究を進めた。その成果を 2018 年 5 月の第 52 回ロマンス語学会で発表し、論文にまとめ、『ロマンス語研究 52 号』に投稿した（掲載決定・出版待ち）。

- 前置詞の après が話し言葉において、単独で接続表現として用いられることがあるのに気づき、その用法についての研究を始めた。après は、前置詞、副詞、連結辞としての多機能的であり、かつ空間的、時間的、論理的な「後続性」へと意味を拡大していることが分かった。まず、新聞記事とインフォーマルな話し言葉のコーパスに現れる用法の違いの比較研究を 2018 年 8 月の国際学会 APCLC2018 にて発表。2018 年 11 月には、8 月の内容をさらに深め、フォーマルな話し言葉、インフォーマルな話し言葉、文学作品、新聞記事の、4 つのジャンルの比較研究に発展させ、オルレアン大学にて行われた国際学会で発表。さらに、その際に、意見交換をしたオルレアン大学の Marie Skrovec 准教授、及び、Layal Kanaan-Caillol 准教授らと共に、1960 年代と 2000 年代の話し言葉コーパスを比較しつつ、継起的な接続表現 après の用法拡大と多義性を記述する研究に取り組んだ。その成果の一部を 2019 年 11 月にフランスのグルノーブル・アルプ大学にて行われた「第 10 回国際コーパス学会（JLC）」で口頭発表。さらに、現在、共著で論文執筆に取り組んでいる。また、après と日本語の接続表現「あと」とについて、構文化の観点から対照研究を行った。これについては、近刊の雑誌 Langages で名古屋大学の藤村逸子名誉教授のもと、他 6 名の研究者と共に、「日仏対照構文化研究」の特別号を共著で投稿した。査読の結果、掲載が決定し、2020 年 12 月発刊の予定で目下出版の準備を進めている。

(3)通時的研究について

- 研究分担者である川口は、研究協力者である東京大学博士課程学生の中川亮氏と共に、1263 年から 1412 年の間に書かれた2つのアングロ・ノルマン語の書簡集を電子化されたデータについて、AntConc を用いてコーパス分析を行った。具体的には、理由節を導く接続詞 que、 por ce que、 car、 par ce que、 puis que について分析した。5つの接続詞のうち、car と por ce que は頻度が高く、par ce que と puis que は非常に頻度が低かった。que は着実に衰退しつつあり、従属接続詞に進化していた。car はこの時期におけるデフォルトの理由接続詞であり、前置・後置のいずれもみつかる。逆に、por ce que はしばしば前置節として現れ、言語行為を正当化する機能を持っていることが分かった。以上の分析は、Yuji Kawaguchi et Ryo Nakagawa, *Que, por ce que, car, par ce que* et *puis que* dans les lettres anglo-normandes (1263-1412), *De la diachronie à la synchronie et vice versa, Mélanges Annie Bertin*, Les Presses Universitaires de Chambéry で論文として出版される予定である。

(4)総合的研究について

- フランス語の理由を導く parce que、 car、 puisque についての共時的、通時的研究を行うことができた。それぞれの機能の変遷と分布が時代により異なることが明確に示された。
- オルレアン大学の協力により、前置詞の après の話し言葉におけるミクロ通時論的研究を行ったことで、接続表現が、様々な言語使用の場面で、どのように語用論化していくのかをデータに基づき、明らかにすることができた。古仏語と現代フランス語のように全く異なる時代のもの

の比較をすることは大変に有益であるが、現代フランス語において、短期間で用法が変遷をしていくものについても、異なった時期のデータを比較研究することによって、談話と文法の関係を明らかにし、より細かな変遷の過程を観察することが可能となった点は大きな発見であった。

(5) 学術的交流について

- 2017 年 11 月：ロレーヌ大学の Bernard Combette 教授を招聘し、東京、京都の 2 か所で講演会を開催し、研究交流を行った。
- 2018 年 6 月：ボルドー・モンテーニュ大学の Labrune Laurence 教授、及び、オルレアン大学の Gabriel Bergounieux 教授と、話し言葉コーパスのデータ処理の方法について意見交換を行った。
- 2018 年 11 月：ボルドー・モンテーニュ大学にて、秋廣が parce que の研究についての招聘講演を行い、言語学学研究所の所員らと意見交換を行った。
- 2018 年 11 月：オルレアン大学にて開催された話し言葉研究の国際学会に秋廣が参加し、口頭発表、及び研究交流を行った。
- 2019 年 3 月オルレアン大学にて、秋廣が表現を含む様々な談話標識とその分析方法について招聘講演を行った。
- 2019 年 5 月～6 月：パリ第 3 大学の Jeanne-Marie Debaisieux 教授を招聘し、東京と京都で話し言葉コーパスについての講演会を行い、研究交流を行った。
- 2018 年 11 月～2020 年 3 月：秋廣はオルレアン大学の Marie Skrovec 准教授、及び、Layal Kanaan-Caillol 准教授と共に、ミクロ通時論的研究を行い、共著で、2019 年 11 月には国際学会で口頭発表を行い、その成果を現在、論文に執筆中である。

(6) 今後の展望について

- 本研究を通して、接続表現の使用が、コミュニケーションの単位である談話の構成に重要な役割を果たしていることが明らかになった。接続表現として用いられる要素の分析には、少なくとも、統語レベル、韻律レベル、意味レベル、モダリティ表示のレベル、談話構築のレベルでの複合的なアノテーションの必要があることが分かった。今後はさらに様々なケースを扱いつつ、アノテーションの方式の改善を試みる。
- 本研究では、共時的、通時的という「時」についての変遷を主に扱った。しかしながら、この研究を通し、時代による違いだけではなく、方言による違い、文体的違いといった変異体の比較研究をするべきことが明らかになった。さらに、接続表現だけではなく、他の様々な談話標識の機能についても、研究を広げる必要があることに気づいた。
- 以上の点に関しては、新たな研究プロジェクト「現代フランス語話し言葉における談話標識と言語変異の記述」（基盤研究 C：研究課題番号 20K00566）で研究したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Hisae Akihiro	４．巻 1
２．論文標題 Discourse function of apres in French informal conversation	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Conference Proceedings of the 4th Asia Pacific Corpus Linguistic Conference	６．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口裕司	４．巻 22
２．論文標題 フランス語における「雌馬jument」再考	５．発行年 2018年
３．雑誌名 語学研究所論集	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 秋廣尚恵	４．巻 22
２．論文標題 フランス語における情報標示の諸要素	５．発行年 2019年
３．雑誌名 語学研究所論集	６．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuji Kawaguchi	４．巻 17
２．論文標題 Reflexion geolinguistique sur le mot sel	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Geolinguistique	６．最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yuji Kawaguchi	4．巻 43
2．論文標題 Pomme de terre “potato” in French - A Geolinguistic Analysis of Lexical Variation	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ふらんぼー	6．最初と最後の頁 38-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yuji Kawaguchi	4．巻 43
2．論文標題 Pomme de terre "potato" in French -A Geolinguistic Analysis of Lexical Variation-	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Flambeau	6．最初と最後の頁 38,52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuji Kawaguchi	4．巻 17
2．論文標題 Reflexion geolinguistique sur le mot sel	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Geolinguistique	6．最初と最後の頁 7,22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuji Kawaguchi	4．巻 1
2．論文標題 La structure prosodique reflete-t-elle la structure syntaxique ?	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Actes du Colloque International 2016;echanges culturels d’aujourd’hui: Langue et Litterature	6．最初と最後の頁 185,197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 秋廣尚恵	4．巻 51
2．論文標題 新刊紹介　S. Gomez-Jordana & J.-C. Anscombre (eds.) (2015), Dire et ses marqueurs, langue francaise 186, Larousse	5．発行年 2017年
3．雑誌名 フランス学研究	6．最初と最後の頁 73,75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　7件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 秋廣尚恵
2．発表標題 フランス語における「対比」、「譲歩」を表すparce queについて
3．学会等名 日本ロマンス語学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hisae Akihiro
2．発表標題 Discourse function of apres in French informal conversation
3．学会等名 The 4th Asia Pacific Corpus Linguistic Conference（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hisae Akihiro
2．発表標題 L’emploi de apres en tant que connecteur - evolution et variation
3．学会等名 50 ans de linguistique sur corpus oraux, apports a l’etude de la variation（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Hisae Akihiro
２．発表標題 Parce que observe en francais parle
３．学会等名 ボルドー・モンテーニュ大学　言語学セミナー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hisae Akihiro
２．発表標題 Annotation des marqueurs discursifs dans le corpus de TUFS
３．学会等名 オルレアン大学　言語学セミナー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 S. Detey, M. Le Coz, L. Fontan, C. Barcat, H. Akihiro, K. Sugiyama, N. KondoYuji Kawaguchi
２．発表標題 Annotations minimales multi-niveaux d’un corpus de parole spontanee d’apprenants japonais de FLE et traitement automatique
３．学会等名 perspectives didactiques, Journee Floral-(I)PFC-IPFC 2018 : Contact de langues et (inter)phonologie de corpus（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 S. Detey, I. Racine and Yuji Kawaguchi
２．発表標題 Dix ans d'IPFC : breve retrospective et perspectives de developpement
３．学会等名 Journee Floral-(I)PFC-IPFC 2018 : Contact de langues et (inter)phonologie de corpus（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuji Kawaguchi
２．発表標題 Projet d’adaptation en japonais du volume ‘Les varietes du francais parle dans l’espace francophone’
３．学会等名 Journee Floral-(I)PFC-IPFC 2018 : Contact de langues et (inter)phonologie de corpus（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川口裕司
２．発表標題 日本語を母語とするトルコ語学習者におけるR音について
３．学会等名 外国語教育学会第22回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuji Kawaguchi
２．発表標題 What the ALF does not tell us
３．学会等名 Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hisae Akihiro
２．発表標題 L'emplploi d'apres en tant que connecteur, etude contrastive avec ato en japonais
３．学会等名 Approche contrastive franco-japonaise sur la grammaticalisation, la lexicalisation, le figement（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hisae Akihiro
２．発表標題 Apprentissage des phrases complexes chez des apprenants japonais
３．学会等名 Apprenants japonais de francais et recherches sur corpus（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuji Kawaguchi
２．発表標題 Lexical change and Dialect Distribution -Potatoes in French-
３．学会等名 Methods in Dialectology XVI, Workshop 4 : Contrastive Geolinguistics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川口裕司
２．発表標題 語彙的多様性と歴史的変遷―EclairとPomme de terre―
３．学会等名 日本フランス語学会談話会「フランス語の多様性」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川口裕司
２．発表標題 フランス語 SEL「塩」の語形変化―言語地理学的再考
３．学会等名 日本ロマンス語学会第55回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名 大島弘子（編）秋廣尚恵、岩内佳代子、牛山和子、大島弘子、神山剛樹、黒沢晶子、砂川有里子、竹村亜紀子、中尾雪江、中島晶子、中村デロワ弥生、野田尚史、ジャン・バザンテ、東伴子	4．発行年 2018年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 261
3．書名 『フランス語を母語とする日本語学習者の誤用から考える』	

1．著者名 Sylvain DETEY Jacques DURAND Bernard LAKS Chantal LYCHE 編著／川口裕司 矢頭典枝 秋廣尚恵 杉山香織 日本語版編訳	4．発行年 2019年
2．出版社 三省堂	5．総ページ数 232
3．書名 『フランコフォンの世界コーパスが明かすフランス語の多様性』	

1．著者名 青木三郎・渡邊淳也・ダニエル＝ルボー・守田貴弘・須藤佳子・プヨ＝バティスト・稲葉梨恵・奥田智樹・秋廣尚恵・田代雅幸・石野好一・藤村逸子・ドルヌ＝フランス	4．発行年 2017年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 386
3．書名 フランス語学の最前線5　特集　日仏対照言語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川口　裕司 (Kawaguchi Yuji) (20204703)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	